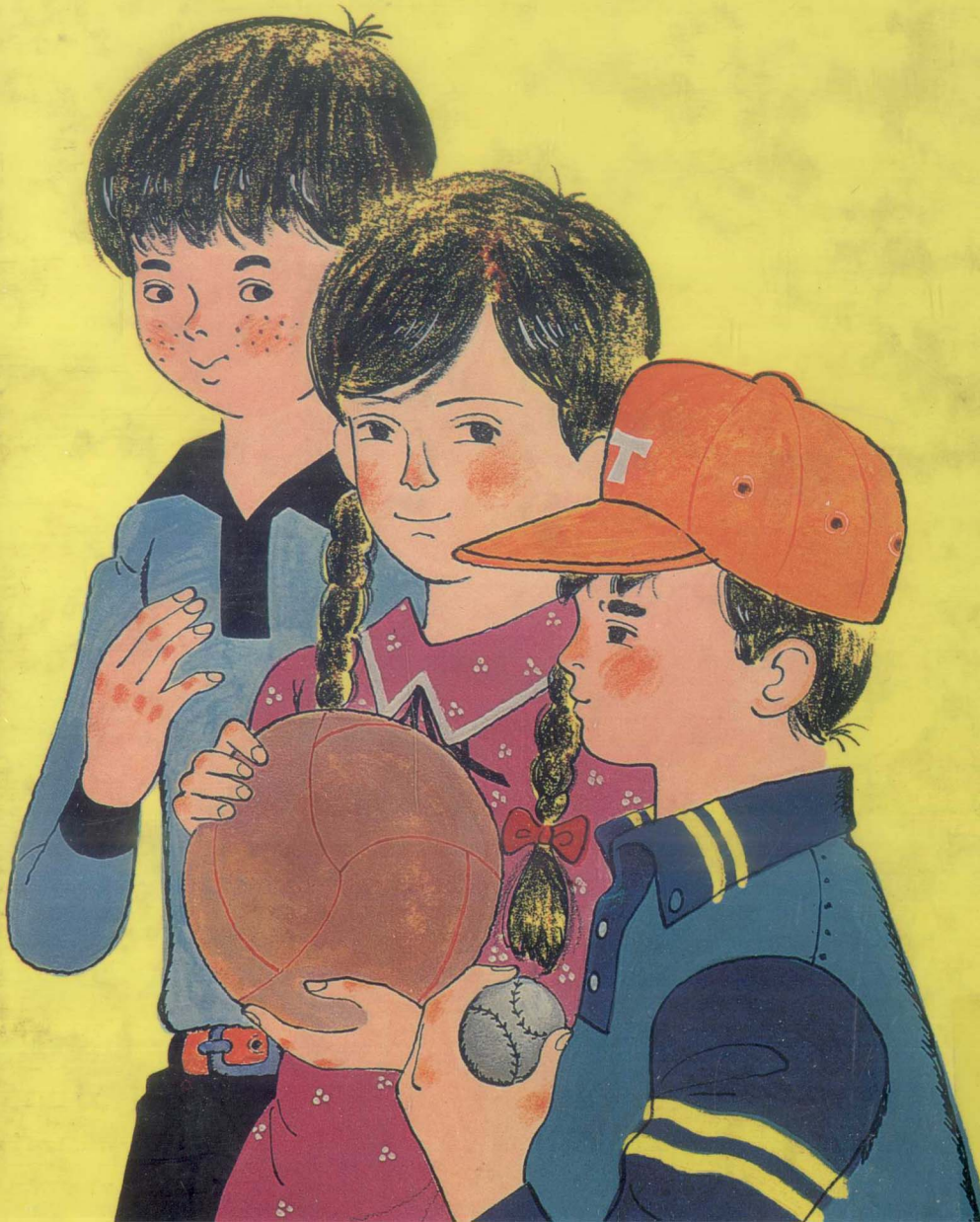
あしたの天気図

古世古和子

絵　渡辺安芸夫



あしたの天気図

古世古和子　絵・渡辺安芸夫

913
古世古和子
あしたの天気図
講談社　1982
198p　22cm（児童文学創作シリーズ）
こせこ　かずこ

あしたの天気図（てんきず）

昭和57年6月26日　第1刷発行

定価980円
著　者　古世古和子（こせこかずこ）
発行者　三木　章
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話　東京03(945)1111(大代表)
振替　東京8-3930
印刷所　株式会社　廣済堂
半七写真印刷工業
製本所　島田製本株式会社

© Kazuko Koseko 1982 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、ごめんどうですが、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-119051-2 (0)　（児一）

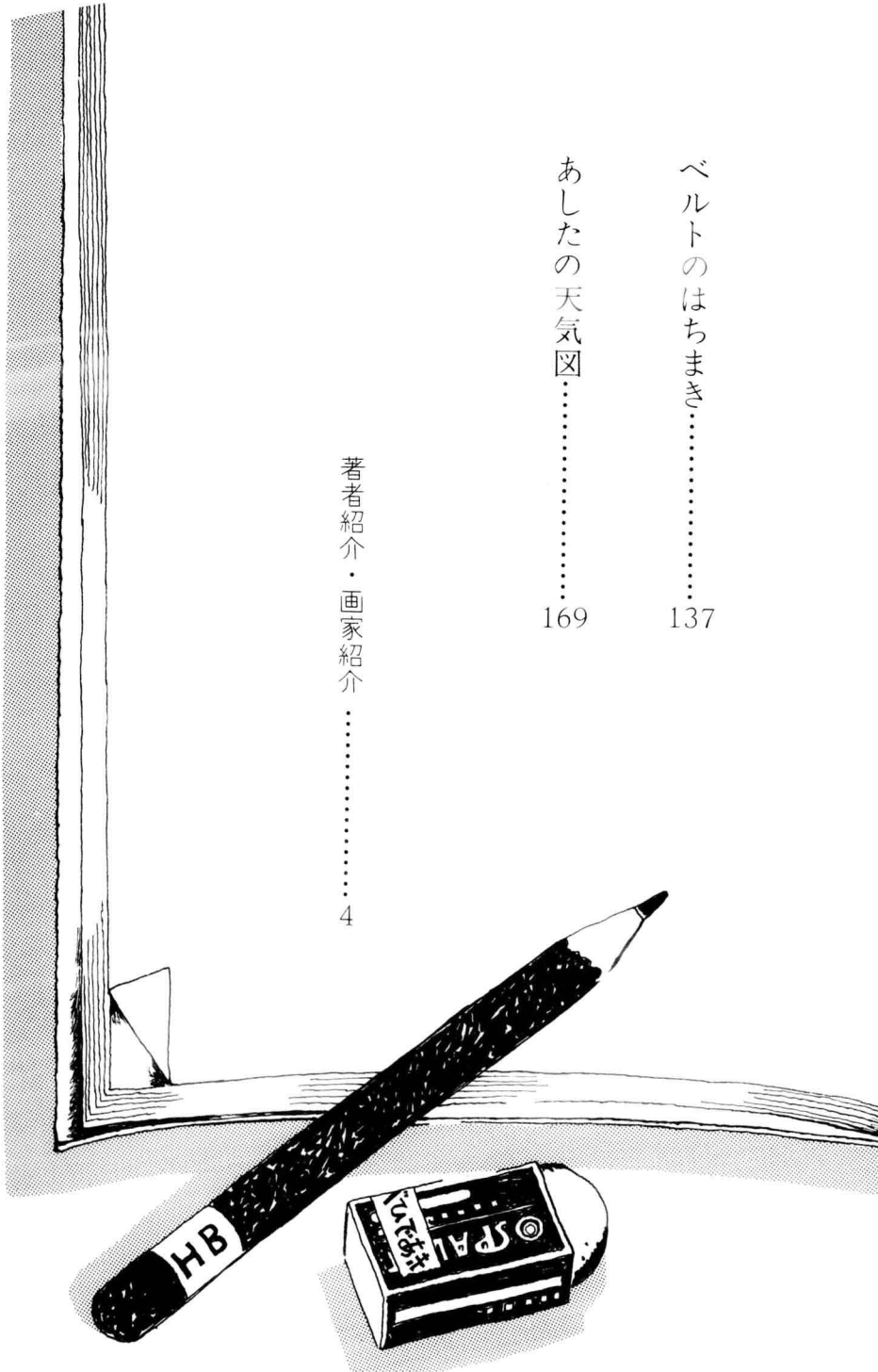
あしたの天気図

もくじ

いちどはおいで……5
わらいの館……37
おには外！……69
春のお客さま……107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ベルトのはちまき……137
あしたの天気図……169
著者紹介・画家紹介……4



■著者紹介——古世古和子（こせこかずこ）

一九二九年、三重県に生まれる。一九五三年、朝日小学生新聞に応募した童話「雲の子の希望」が入選する。一九六三年、長年つとめた小学校の教職を退き、創作に専念する。日本児童文学者協会会員。著書に、「竜宮にいったトミばあやん」「赤い月」「ランドセルをしょったじぞうさん」「学校やすみたいのはんたい」などがある。

■画家紹介——渡辺安芸夫（わたなべあきお）

一九四九年、福島県三春町に生まれる。フォルム洋画研究所で学び、現在、油彩の制作、出版物の装丁、イラストの仕事に従事。おもな児童書の仕事に、「大ちゃんの青い月」「おにの子はホームラン王」「はんたいのハンタくん」などがある。

いちどはおいで

復習の計算問題二十題までをやりおえて、桂は大きなのびをした。
（あと五題だけど、わり算か……。）
わり算はすきじゃない。ふうっと息をはきだしたら、となりのへやからおとうさんがよんだ。
「桂、消しゴムをかしてくれないか。いいのがあるかい？　きれいに消えるやつじゃないとこまるんだが。」
桂は、まずい！　と思い、あわてて筆入れの中や教科書の下をさがした。
「消しゴムね、ええと、どこへ……。」
とっさに、ごまかしのことばをつぶやいてしまった。
「そうなんだよ。まったく消しゴムってやつは、ひょこっと見えなくなっちまう。夕飯まえにちょっとつかって、たしか図面の上においたつもりが、ないんだよ。ポケットへでもいれたかと思ってな、さがしたんだがはいっていない。」
（ないはずだよ。その消しゴムはぼくが、さっき……。）

おとうさんがトイレへいっているあいだに、図面の上から、だまってかりてきたのだった。

あった！　おとうさんの消しゴムは、つくえの足のそばに落ちていた。ひろいあげたが、ぼくがだまってかりた、と正直にいわなかったので、どうも、かえしにくくなった。それに、おとうさんは、ずいぶんさがしまわっていたらしい。だまってかりたなんて、いえやしない。

じぶんの消しゴムとちがって、おとうさんの消しゴムは、白いままかたすみからていねいにつかわれている。桂は、てのひらににぎった消しゴムを、ズボンのポケットの底へ落としこんだ。じぶんの消しゴムは、目のまえの算数のノートの上にある。うすよごれているし、えんぴつでつきさしたあなが三つもある。

夕飯のあと勉強をはじめたが、この三つあな消しゴムが見つからなかった。それで、すぐにもどしておくつもりで、おとうさんのをかりたのだった。それなのに、知らないうちに三つあな消しゴムをつかっていて、おとうさんのをつくえの下へ落としていた。

「ぼくの、きたなくしちゃってるけど、いいかなあ。おとうさんが買ってきてくれたやつだから、よく消えるけど……。」

桂は、しょうじをあけて、じぶんの消しゴムを見せながら、おとうさんが仕事をしているテーブルのはしへおいた。

テーブルの上には、トレーシングペーパーがひろげられていて、その上に、雲形定規や線引きやシャープペンシルがおかれている。おとうさんはしんけんな目をして、ノートになにかかいていた。

「ありがとう。かりるよ。」

目をあげたおとうさんは、

「なんだ、こりゃあ。」

といって、三つあな消しゴムに手をのばした。桂は、かたをすくめた。

「消しゴムが必要なときは、消しゴムが最高の道具なんだぞ。」

おとうさんは、ノートのすみで消しゴムをごしごしこすって、よごれたところをへらしはじめた。目はもう、図面を見ている。

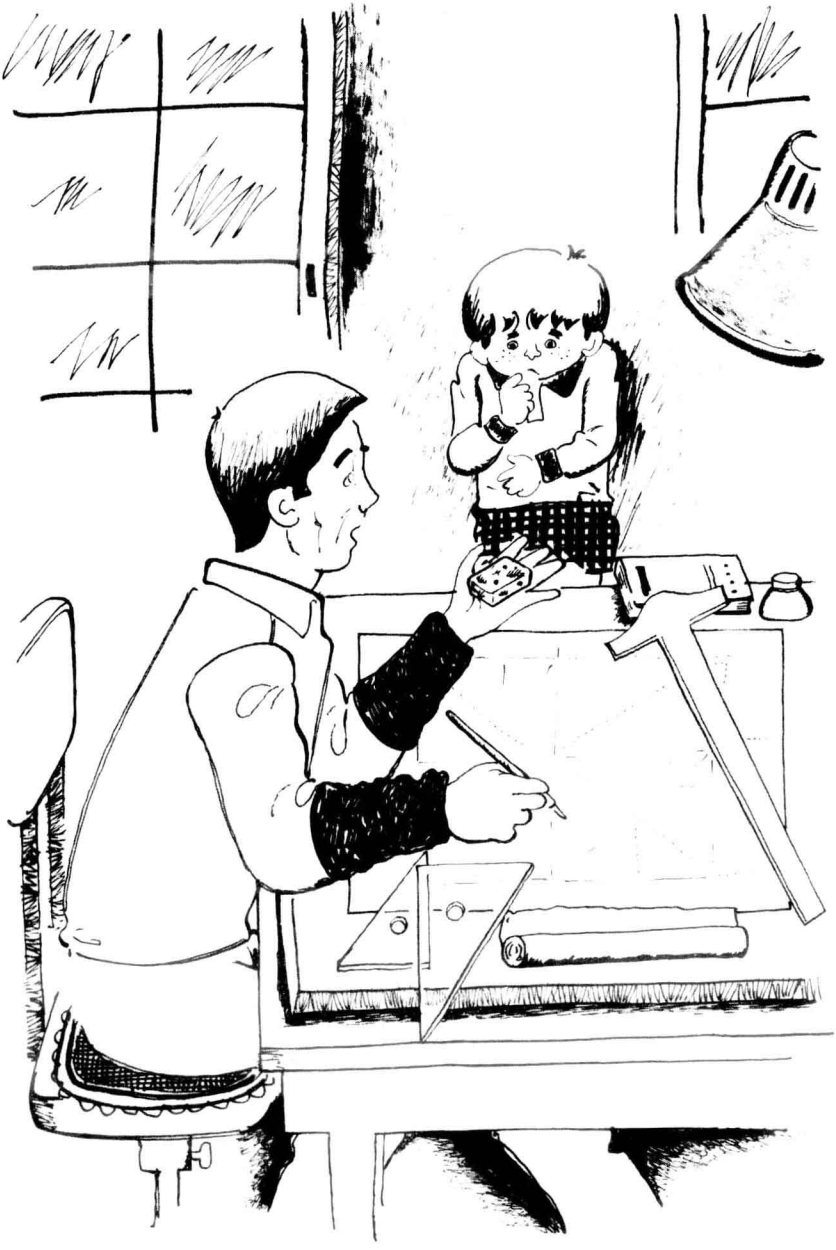
スタンドの光のせいか、目じりとほおがきわだって光り、あごがとがって見える。こいまゆの下はくぼんで目じりがこわいほどするどい。このところおとうさんは、げっそりとやせた。

「桂がつかうときは、とりにおいで。」

「ぼくは、あとすこしで勉強おわりだから……。」

桂は小声でいって、しょうじをしめた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



（ごめんよ、おとうさん。）

ポケットの底の消しゴムを、そっとにぎった。おとうさんにとって、これはたいせつな仕事道具だった。図面を見ていたしんけんな目がこわかった。

桂は、つくえの上にちらかった教科書やノートを、きちんとなおさずにはいられなかった。

おとうさんがつとめているのは、マイクロコンピューターやミニコンピューターを応用して、いろいろの機器をつくっている小さな会社だ。四年生の桂が生まれた年から、おとうさんはその会社につとめている。五年ほどまえまでは三十人の社員がいた。だが、おなじ仕事で競いあう会社がふえたのと、社員が半分、べつな会社をつくって分かれていったので、仕事がうまくいかなくなった。社長は技術ひとすじの気性ですぐれた力をもっているのだが、営業能力に欠けている。それを批判したものたちがはなれていってしまったのだった。

そのうえ、景気がわるくなった。経営が苦しくなったので、三年ほどまえからは、パートの女の人をやとって、ゲーム機械をつくりはじめた。だが、そのゲームは社会的に問題にされて、流行はすぐ下火になった。社長は、もとの仕事のほうへもどそうと必死になったが、もう、思うようにはいかなかった。

おとうさんは、十年もつとめてきた会社なので、この半年ほどは、夜中までも必死に働いた。それほどにしてみても給料はおくれ、夏のボーナスも、もちろんもらえなかった。九月にはいってからは、おとうさんは早く帰るようになった。もとにもどそうとした仕事は思うようにはかどらず、会社はだめになりそうなのだった。

早く帰るようになったおとうさんは、夕食のあとすぐつくえにむかい、徹夜で図面をかきだした。親友の小松さんが、アルバイトの仕事をもってきてくれるのだ。小松さんがつとめている会社は大きい。おとうさんが、その会社へはいれるようにと、小松さんは、ほねおってもくれている。いまかいている図面も、今夜にはもう、かきあげなければならないのだった。

「おいっ、おかあさん！」

と、おとうさんがよんだ。

（おふろかな。）

ちょうどわり算がおわったところだったので、桂はいすを立った。そういえば、流しで夕食のかたづけの音がしていたあと、おかあさんの声はぜんぜんきこえなかった。

おかあさんは、おくの六じょうにいた。鏡台のまえにすわり、かがみこんで手帳になにかかい

ている。ひざのまえに、いろいろのけしょう品のはこやびんがならんでいる。

おかあさんは、三か月ほどまえから、けしょう品のセールスの仕事をはじめた。いまも、仕事に必要なメモをとっているようすだ。

「おとうさんがよんでいるよ。きこえなかった？」

と、桂にいわれて、おかあさんはびっくりしたように目をあげた。

電話が鳴った。

桂は、居間のまえにきて、受話器をとった。

「もしもし、井口ですが。」

「お、桂くんだな。ぼく、小松です。」

低いけれどよくひびく声は、小松さんの太い首、いや、のどからなめらかにでてくるのだ。だんごっ鼻にどんぐり目、うまれつきのパーマだよ、といって、えり首で適当に切っているうすい髪。どう見たって男っぷりがいいとはいえないが、声はいつきいてもすごく男らしい。

「桂くん、子どもはもうそろそろねろよ。ねる子は育つっていうからな。ところで、おとうさん、いねむりしているようなら、起こしてきてくれないか。」

（いやだなあ。こんな時刻にぼくはねないし、おとうさんはいねむりどころじゃないや。）

「……と、いうのはじょうだん。ごめん、ごめん。ほんとはな、おとうさんがいねむりをしてくれるようなら、と思ってんだ。」

「おじさん、ちょっと待ってください。」

わらい顔になってこたえたときは、おとうさんがそばへきていて、桂の手から受話器をとった。桂は流しへきて、水を飲みながら、おとうさんのことばをきいていた。

「……だいじょうぶだよ、ちゃんとねている。……せっかくだが、今夜は酒より仕事……三か月先？　そうだろうなあ。来月からでもってのは、こちらのあまい考えってもの……。たのみます。……図面はいま、調べあげている……はい、じゃ。」

受話器をおいたおとうさんは、ふうっと息をついて、「酒か。」とつぶやき、

「おかあさん、お茶のあついのを……。」

といった。

「は、はい。ちょっと待って……。」

おかあさんは、けしょう品を大きなバッグの中へつめていた。

「お茶がほしいといっているんだぞっ。あついお茶だよ！」

おとうさんは、おくのへやをのぞいて大きな声でどなった。そして、あらっぽい歩きかたでじ

ぶんのへやへいった。

気ぜわしそうに、おかあさんが流しへきた。

「桂ちゃんには、紅茶、いれてあげるわね。」

「いらないよ。ぼくは。」

桂は思いだしたのだった。たしかおかあさんは、今夜、おばあちゃんの家へいくといっていた。おかあさんのおかあさん——おばあちゃんは、お花の先生をしている。おかあさんは、おばあちゃんのお花の教室でけしょう品の注文をもらってくる。今夜も、まえにたのまれた品をとどけて、新しく注文をもらってくるのだといっていた。おばあちゃんはひとりぐらしだが、六十さいとは思えない元気なようすで、家でお花を教えたり、でかけていって教えたりしている。おかあさんもあとすこしでお花を教える免状がもらえる。それで、けしょう品のセールスをかねて、おばあちゃんから習ってくるのだった。

（おかあさんは、でかけるしたくに気をとられていたんだ。それで……。）

桂は時計を見た。八時半になるところだ。

おばあちゃんの家へいくには、電車に乗って一時間とすこしはかかる。

あついお茶を、おとうさんのところへおいてきたおかあさんが、冷蔵庫をあけて、桂にいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com